翻訳

サミール・ハリル・サミール「アラブ世界におけるキリスト教徒の文化的役割」

訳・戸田　聡

訳者序言

ここに訳出する講演（Samir Khalil Samir, *Rôle culturel des chrétiens dans le monde arabe*, coll. «Cahiers de l'Orient chrétien» 1, Beyrouth: CEDRAC, 2003）を行なったのは、キリスト教アラビア語文学の研究で世界的に著名なレバノン人学者、サミール・ハリル・サミール氏である。一九三八年生まれの氏は、ヨーロッパで学位を得、ローマの教皇立東洋学研究所などで教鞭を取った後、レバノン・ベイルートの聖ヨセフ大学においてキリスト教アラビア語文学研究・資料センター（CEDRAC）を創設、現在はその所長である。当該分野に関する氏の業績は極めて多く、http://www.cedrac.usj.edu.lb/pres/bibliosks.htmというウェブサイトに数年前時点でのほぼ網羅的なリストが掲載されている。

本講演の意義は講演本文の「序説（の一）」及び「結論」から明らかだろうが、訳者なりに述べるなら、ここ数年来、世界の情勢を不安定にしているのは、或る意味で西欧社会の代表と言える（その意味で、「極東」ならぬ「極西」と言ってよい）アメリカを巻き込んでの、中東での紛争である。この紛争を難しくしている大きな要因が（アメリカ或いは西欧と、中東との間の）文化の違いに存するということは、改めて言うまでもない。

しかし実は中東は、文化的に一枚岩なのでは決してない。確かにイスラム教徒が多数を占めており、日頃彼らの活動だけがニュースその他で外部の人間には伝えられるが、それ以外の人間集団も種々存在する。その中で、割合にしてたぶん最も大きな集団がキリスト教徒だろう（もちろん、キリスト教も内部で諸派に分かれてはいるのだが）。その中東のキリスト教徒が、多数派のイスラム教徒に囲まれ、かつ先進的な西欧からの刺激・圧迫を受けつつ過ごしてきた自分たちの来し方を反省し、これからの自らのあり方について発信しようとしたのが、ここに訳出した講演である。アル・ジャジーラのような中東発の報道機関が育ってきてはいるものの、なお西欧を中心として回っている今日の情報世界（明治

維新以来の日本もまた、西欧の中で認められようとする方向で自己形成を遂げてきたと言ってよい）の中で、中東の人間の発信に直接接しうることは、国際情勢に関して広い視野を得ようとする誰もが歓迎すべきことではなかろうか。（なお、基となった講演の性格上、処々（特に結論部）で著者のキリスト教徒としての立場が前面に出てくることを予め記しておきたい。）

訳註については、詳細な訳註を付することも考えたが、一般の読者の聞き慣れない人名・事項があまりにも多く、訳註は本稿の量を倍化させかねない。また、そもそも本講演では、初出の人名・事項がそれなりにわかりやすく導入されているように思われる。よって、原則として訳註は付さず、必要な場合には本文中に補足的説明を入れることとした。人名・事項の多くについては『イスラム事典』（平凡社刊と岩波書店刊がある）に説明があるので、そちらを参照いただきたい。

はしがき

二年前の一九九九年十一月、レバノンでの宗教者会議で行なった長時間の講演を基に本シリーズの第一巻が刊行され、六ヶ月後には千部が売り切れとなりました。その後ほどなくアラビア語版が、若干の補足と重要文献のリストつきで刊行されています。

今回第二版を出すに当たり、若干の手直し・修正と、所々で若干の加筆とを行ないましたが、講演というスタイルは変わっていません。各パラグラフは専門的研究に基づいていますが、（一般の読者への）普及を図るというこのシリーズの性格を尊重するため、それら典拠は示されていません。

中東に生きる我々にとって、諸民族集団・諸宗教グループ間の関係という問題は今や、イラクであれレバノンであれ他のアラブ諸国であれ、かつてないほど重要です。本書ではキリスト教徒とイスラム世界の関係の文化的次元しか扱わず、他の次元は、今後出る冊子の中で扱います。その目的は、自由の空間を誰にもまたどの共同体にも保証する、かつすべて人間的なものに対して開かれた、そのような共同社会を、イスラム教徒とキリスト教徒が共に建設することです。

序説

ほとんどすべてのアラブ諸国においてキリスト教徒が、自ら「アラブ人」と名乗ったり、或いは自らを定義するのに「アラブ（的）」という語を使ったりすることを、拒否するようになってきているのを私たちは目にしています。このような状況はここ数十年の間に広がりかつ強まりつつあり、私はこの現象をイラクでもエジプトでもレバノンでも、また程度はやや劣りますがパレスティナやシリアでも、目にしました。なぜこういう拒絶的態度が生じるのでしょうか。「アラブ（性）」という語とテーマを十九世紀に使い出したのはまさにキリスト教徒、しかも特にレバノンのキリスト教徒であるにもかかわらずです。一世紀を経てこういう変化が起こる理由は何なのでしょうか。

一　二十一世紀を建設するためにアラブ文明について省察する

①ところで、我々はレバノンで落胆すべき状況（これは政治・経済の状況と関連してい

ます）の中に生きています。それは、レバノンを構成してきた全体が解体しつつあるがゆえに、万人に、とりわけキリスト教徒に、影響を与えています。

さらに重要なことに、我々は今、グローバリゼーションなどと呼ばれている世界的変化の段階に入っています。この文明史的現象は世界のあらゆる国に影響を与えていますが、とりわけ第三世界、そして同時に第三世界の一部を成すアラブ世界（レバノンを含む）に影響を与えています。

地球上のすべての民、すべての文化を集めて一体化しようというグローバリゼーションの名のもとで、現実には、現在最も強大な文明（西欧文明、特に米国の文明）が支配的になることで、全く当たり前の成り行きによって、他のすべてを呑み込みつつあります。

これは事実でありその確認であって、告発ではありませんが、勢い我々は、より良い方向性を見いだすべく、この状況の光と影について自問することになります。が、今日支配的となっているこの西欧文明の周縁に位置する国々にとっては、問題はほとんど解決不可能です。

②二つの道が考えられます。今の流れに従い、（様々な文化の民俗的遺物は保ちながらも）西欧文明に吸収されるリスクをあえて冒すか、それとも、諸文化・諸文明の価値をより強調することによってこの地球規模の運動をより豊かなものにし、その結果、西欧文明の豊富化をではなく、（諸文化・諸文明の）あらゆる貢献の結果として生じ、たぶん「世界的」と称すべきものとなるであろう、そのような新たな文明の構築を目指すか、という二つの道です。

こうしてみると、二十一世紀の文化を作り上げていく上で、我々がアラブ文化・文明ないしは中近東の文化・文明について省察するのは、方法は様々ありえますが、避けて通れないことなのです。

愛すべき女の天幕の跡についてジャーヒリーヤ時代の父祖たちが詩作して歌ったように、過ぎ去った時代の栄光を歌い上げることは、我々の話の主眼ではありません。また、征服的な態度をとりたくもありません。むしろ静かに、自分の由って来たる所以と向き合い、世界に様々あるアイデンティティーの中で自分のを位置づけたいと思います。

③以上の目的のもと、第一の講演では、過去十四世紀間の歴史をたどって、キリスト教徒が果たした役割を想起することにします。まず、この地域においてその役割がどのようなものだったかを検討し学びたく思います。次いでそこから、可能ならば、我々の将来のために導きの糸となりうる、いくつかの主要な線を抽出するべく努力したいと思います。

というのも、今日我々が直面し、時として我々を苦しめる問題とは、どの程度我々は展望をもてるのかということだからです。キリスト教徒はこの国でなお何らかの位置を占めうるのか？　これらの問いに答えるのが第二の講演のテーマとなります。

かくて、未来志向的なものとなる第二の講演の準備段階として、私の第一の講演は回顧的なものとなります。

二　イスラム以前における、ヘレニズムの遺産の、シリア語圏の人々による獲得

①イスラムの征服より以前、この地域（シリア・レバノン・パレスティナ、メソポタミア、そしてエジプト）はそれぞれ、哲学・科学・法学・神学といった分野で名だたる学

校・学派を擁し（アレクサンドリア、ベリュトゥス（今のベイルート）、アンティオキア、エデッサ、ニシビス、イランに至るまでのメソポタミア全体、そして六世紀からはジュンディーシャープール）、文化の偉大なる発信地でした。かくて、人々ははるばる遠方から、数学・天文学・哲学を学びにアレクサンドリアに行き、また法を学びにベリュトゥスに行きました。

キリスト教徒は、ギリシア語話者であれシリア語或いはコプト語話者であれ、しばしばバイリンガルでした。ギリシア語が当時（すなわち古代）のコイネー、つまり教養人の共通語として認められていたからです。西欧中世でラテン語が、また中世のイスラム世界でアラビア語がそうであったのと同様です。シリア語は商人の言語でした。

②しかし、五世紀以降、四三一年のエフェソス公会議、そして四五一年のカルケドン公会議を機に、それまで一つだった教会は三つの大グループに分かれます。中近東においてネストリオス派、ヤコブ派、皇帝派と呼ばれるグループがそれです。

現実には、見かけ上神学的問題に発するこの分裂の背景には、文化的分裂が潜んでいました。地域文化（シリア語、コプト語、アルメニア語）の勃興が、支配的・侵略的文化たるギリシア文化に対する異議申し立ての発信拠点を生みだしたのです。

支配的な文化（西欧文化）と支配的な言語（英語）が次第に他の文化・言語を排除しつつある今の状況を思わせるような現象です。しかし、この現象には神学的次元が含まれていました。

③五世紀より以降、特に六・七世紀に、ギリシア語の著作をシリア語に訳す大がかりな運動が始まっています。これと対比できる翻訳運動がこの地域の外でも、アルメニア語とグルジア語について見受けられ、また程度は劣りますが、コプト語とエチオピア語についても見られます。こうして、医学・数学・哲学・神学を教える学校が発展していきます。我々の地域では、これら学校で用いられた言語はシリア語でした。

この翻訳運動は当時の文化の全領域に及んでいました。医学で言えば、古代における偉大な二人の医学者、ヒッポクラテス（前五世紀）とガレノス（後二世紀）の入手可能なすべての著作が翻訳されています。哲学で言えば、主たる関心の対象はアリストテレスであり、次いでやや劣りますがプラトンと新プラトン主義、それらの著作のうちのいくつかは誤ってアリストテレスのものとされていました。

かくて、シリアのリーシュアイナー（地名）のサルギースや、特にメソポタミアのヒーラ（地名）のフナイン・ブン・イスハーク（九世紀）といったビッグネームとともに、或いはまた、知名度は劣りますが、それら著作の翻訳や註釈に打ち込んだ幾人もの主教・総主教の努力とともに、一つの文学全体が少しずつ次第に踏査されていき、それがギリシア語古典の遺産の、（当時この地域の民衆の言語だった）シリア語への伝承という運動をつくりだしていきました。

A　イスラムの征服と文化受容の現象

一　イスラムの速やかな征服

①イスラムの預言者、ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフ（マホメット）は五七〇年ごろに生まれ、六一〇年にはメッカで宣教

を開始しましたが、反対の動きが拡大したため、六二二年にメディナに移住します。いわゆるヒジュラです。それから彼は戦争と略奪を開始し、十年の間に、自らの知恵と政治的センスのおかげで、イスラムと唯一神という強力な理念の旗のもとにアラビア半島のアラブ部族・都市の大半を糾合することに成功します。

②彼の死後、後継者は速やかにイスラムをアラビアの外へと押し広げます。第二代カリフ、ウマル・ブン・アルハッターブ（六三四—六四四）は中東の広範な地域を征服します。六三六年にはエルサレムとダマスクスがイスラム教徒の手に落ち、イラン征服もまた始まります。六三八年にはメソポタミア全体が征服され、六四一年にはイラクが陥落します。同時並行的に、六三九年にはバビロン（今のカイロ旧市街）が征服され、六四一年にはアレクサンドリアが征服されます。ムハンマドの死後十年の間に中東はイスラムによって席巻されます。

しかし、どの程度「征服」という言い方ができるのでしょうか。数万人の人間が一つの地域ないし国を統治することになりますが、そこの住民は過半がキリスト教徒で構成されています。例えばエジプトは「Gipti」（エジプト人）が九九%を占めています。そして彼らはキリスト教徒なので、エジプトのキリスト教徒は「Gipti」すなわち「コプト人」と呼ばれることになります。シリア—レバノン—パレスティナの地域では、住民は「Suryân」つまり「シリア人」と呼ばれることになります。

③征服の当時、イスラム文明はまだ形成途上にありました。理由は単純で、「文明」（civilisation）という語はラテン語のキーウィスcivis（都市）に由来します。アラビア語のハダーラ（「文明」）がハダル（辞書の語義説明によれば、「都市・村落・定住民を含む文明化された地域」）に由来するのと全く同様であり、そして周知のように、アラブ人はつねに、定住民をベドウィンと対比させてきました。

したがって、言葉の語源的意味からみて「ベドウィン文明」なるものはありえない、自己矛盾なのです。実際、ベドウィンは跡を残さず、生き方からして、一つの場所から別の場所へと移動し、行った先で資源（植物、水等々）を使い尽くすまで使い、そして新たな地へと移動していきます。文明が存在するようになったのは、持続的な仕方で都市が組織され構築されてからのことです。

ところがアラブ文明は生まれたばかりであり、メッカやメディナ（すなわちヤスリブ）といった都市、或いは豊かなオアシスがいくつか存在したとはいえ、文明（その語源的意義における）が存在したことを証しうる建造物や目に見える形跡はごくわずかでした。

二　征服した文化との遭遇

かくて、イスラム教徒がシリアにやってきた時、彼らはその建造物・宮殿・教会・修道院に目を奪われ、またその技術と、これらの建造物の背後にある学問とに目を奪われました。爾来彼らはそのような知識を習得しようとし、征服した住民に、過去の文明の知識を自分たちに伝えるよう求めることになります。

この賛嘆の念は建築にとどまるわけではなく、これら住民たちが有した行政組織にも及びます。何しろイスラム教徒たちは、これほど広い地域を統治する機会が未だなかったのですから。

こういったことは言語のレベルではっきりと現れています。つまり、ギリシア語・ラテン語・ペルシア語・ヘブライ語・シリア語・さらにはエチオピア語といった、中東の諸言語からの数多くの借用ということにおいてです。この現象は征服以前にも既に見られ、コーランにもその形跡が認められます。

三　文明言語としてのアラビア語の彫琢

①こうして、技術に関するあらゆることがその土地土地の住民から借用されます。アラビア語における軍事用語はアラビア語起源ではありません。例えばカスルはラテン語のカストゥルム（要塞）に由来し、コーランの開端章のシラートという語は、いかにもアラビア語に見えますが、ストラータ（正確にはstrata saxea viarum、つまり石で舗装された道）、つまりローマの道に由来しています。同様に「良き道」という意味のフダーも、非常にコーラン的な単語ですが、ギリシア語のホドス（道）に由来します。

同様に、科学、文字（紙であれ筆であれ）、行政に関するいかなる語も、アラビア語起源ではありません。これらの語はギリシア語またはシリア語に由来し、征服された地に生きていたキリスト教徒から伝えられたものです。ラテン語がギリシア語経由でアラビア語に入ったケースもあります。ヴェレダリウムがそれで、アラビア語のバリード（郵便）の元となっています。

コーランにおける外国語からの借用に興味のある読者は、特にコーランにおける外国語に関してアルスユーティー（一五〇五年没）のMuzhirに集められたアラビア語の古い教科書を参照するとよいでしょう。その中で彼は、どのようにしてこれらすべての単語が入り込んだか、つまり、それらがもともとはアラビア語に属していないかを、論証しています。同時代の大勢の学者が護教的目的から、コーランの中の単語は純粋にアラビア語起源なのだということを証明しようとしていたのと対照的な、学問的態度と言えます。

②かくて、文明にかかわる用語は闖入した言葉なのです。その意味は、アラブ文明は拡大し、他の諸文明を包摂しつつ豊かになった、ということです。これは様々な分野において顕著で、最も単純な語彙から最も抽象的な語彙にまで及んでいます。

例えば、テーブルを言い表すのに、tâwulah（ラテン語のtabula）、エジプトではタラーベーザ（ギリシア語のトラペザ）、khiwân（ペルシア語）といった、すべて外来語が使われます。というのも、アラブ人たちは砂漠でテーブルなど使わなかったからです。

神学で神の位格を表すのに使われるuqnûmという語は、ファーラービーであれイブン・シーナー（アビセンナ）であれイブン・ルシュド（アヴェロエス）であれ、すべての中世アラブ哲学者が用いる単語ですが、シリア語のクノーモーに由来し、キリスト教徒によってアラブ文明にもたらされました。アブド・アッラーフ・ブン・アルムカッファ（七五九年没）は本質（substance）という語を訳そうとしましたが、適当な語が見つからず、単語を訳さずに問題を回避しました。ジャウハルという語が提起されるためにはフナイン・ブン・イスハークを待たねばなりませんでした。この語はペルシア語起源で、語義の変転をたどった単語です。というのは、それは宝石も、或る物の本質も意味しうるからです（どちらをも意味するのは、現代でもそのままです）。

③かくて征服者は同化によって、言語の刷新と豊富化を図ろうとします。カリフたちは、このような知識を（アラビア語に）伝達するよう学者たちに依頼します。その手段は、充分な報酬を支払ってギリシア語からの翻訳を行なわせる、或いは（より廉価で迅速な方法ですが）シリア語からアラビア語に翻訳させるというものでした（シリア語とアラビア語は言語的に非常に近いものでしたから）。

B　黄金時代――アッバース朝の最初の二世紀

一　翻訳

第一段階、すなわち八・九世紀には、ギリシア語やシリア語からの最初のアラビア語訳が登場します。これらはまだかなり粗野な翻訳です。九世紀後半そして十世紀全般を通じて、この（翻訳）運動は強められ完成度を増し、厳格な方法がとりわけフナイン・ブン・イスハーク（八七三年没）及びその弟子たちの活動の影響のもと用いられるようになります。既存のアラビア語訳は、翻訳の改善のためにギリシア語オリジナルと比較されます。哲学的な言い回しがより正確になり、術語的となります。というのも、哲学者たち自身がその翻訳或いは再翻訳に従事したからです。ヘレニズムの遺産の伝承という作業は十一世紀の第三四半世紀に完了します。

翻訳の領域では、当時入手可能だったギリシア思想全体の九〇％以上がキリスト教徒によって翻訳されました。彼らがまず訳したのは実用的な著作、すなわち技術、数学、医学に関するものでした。例えばフナインは、ガレノスとヒッポクラテスの医学の九十六の著作を翻訳しました。そして、翻訳の経験のある者なら誰でも、このような作業がどれほどの労力を要するか想像できるでしょう。さらにフナインは翻訳を続けました。そのことを我々は、彼が友人のイスラム教徒イブン・アルムナッジム（フナインに翻訳のコピーを作ってくれるよう頼んでいました）宛ての手紙の中で書いた自らの翻訳についての報告から、知ることができます。彼は数年後二度目の覚え書きを書きました。これはより包括的ですが、しかし網羅的ではありません。

二　クスター・ブン・ルーカーの例

これら翻訳は実現が容易でなく、しばしばチームでの段階的な作業を必要としました。実際、数学・天文学・神話・哲学・医学・薬学の諸概念を、本質的に文学的・詩的な言語であって、これら諸科学やそれが指し示す現実を言い表す器として整備されていないアラビア語という言語に、どう訳したものか。今日でもこういう難しさは、科学・医学・哲学・言語学の諸文献やインターネットの用語等々をアラビア語に訳そうとする時に我々が実感するところです。多言語に通じた学者の幾世代にも及ぶ協働作業が必要です。

というわけで、十世紀初頭における数学の分野で一例を挙げるにとどめると、クスター・ブン・ルーカー・アルバアラバッキーは、バアルベック出身の皇帝派（のキリスト教徒）でバグダードで生きた人ですが、彼はエウクレイデス（ユークリッド）の『原論』の十章を訳した最後の人物です（他に二人が以前に他の章を訳していました）。

一般に、これら学者は特殊な分野（医学・力学・哲学等々）に特化しますが、それにと

どまってはいません。例えばクスター・ブン・ルーカーは医学と数学、そして特に力学に特化します（彼の五十五の労作の中には翻訳と著作が入り混じっています）。この最後の分野はカリフたちが特に有り難がったもので、というのも、例えば砲弾を飛ばすといった戦争の道具をつくるのに大変有用だからです。彼はまた集光鏡についての著書も著しています。この道具も、光を強度に一点に集中させる鏡を使って敵陣を焼こうという、戦争のために無論重要性を有するものです。

同じクスター・ブン・ルーカーは、メッカ巡礼の期間中に健康を保つための論考を著した最初の人物となります。これは、自分をかかりつけ医者として同行させようとした或る大臣の依頼で書いたもので、我らが学者氏は、妻子がおり面倒を見る必要があるという理由で同行できないことを詫びていますが、くだんの大臣が病気の予防ができるよう、彼のために非常に学問的でかつ実際的な論考をものしています。

三　註釈

①次いで第二期の翻訳者たちが登場し、翻訳を超えて註釈を書くようになります。これが始まったのは修道院の学校においてで、次いで九世紀からはそれ以外のところでも行なわれるようになります。次のようなやり方で作業が行なわれました。すなわち、これこれの大著の短い要約を学生に書き取らせ（こうして書き取らせたものはjawâmi'、すなわち梗概と呼ばれました）、次に教師がその要約を読み上げ口頭で註釈を施すなどして、その要約への註釈を行ないます。こうしてできた註釈を最も出来のよい学生が書写し、そのうちのいくつかが我々のもとにまで伝わっているというわけです。

②これらの学校では第一世代の門徒はみなキリスト教徒でしたが、次第にイスラム教徒の数が増え、ついには多数派を占めるに至りました。我々は例として、十世紀の第三四半世紀における最も著名なアリストテレス学者、ヤフヤー・ブン・アディー（八九三―九七四）を挙げることができます。彼には多くの弟子があり、そのうち最も有名なのは六人のイスラム教徒と四人のキリスト教徒です。この四人、すなわちアブー・アリー・イサー・ブン・ズルア（九四二―一〇〇八）、アブー・ル・ハイル・アルハサン・ブン・スワール、別名ブン・アルハンマール（九四二―一〇一七）、アブー・アリー・ブン・アルサムフ（一〇二七年没）そしてアブー・アリー・ナズィーフ・ブン・ユムン（十世紀末）は（四人目を除いて）まさしく師の教えを書きとめた人々で、それが、現在パリに所蔵されている見事な写本（アラビア語第二三四六番）によって我々のもとにまで伝わっているのです。この写本の本文は近年ファリド・ジャブル神父の二人の弟子によってレバノンで出版されました。

（因みにお気づきでしょうが、これら著者は皆、アリーやハサンなど、今日ではイスラム教徒のものとされる名前を有しています。実際にはこれらは単にアラブ的な名前であり、誰にもふつうの名なのです。我々キリスト教徒のゲットー化が、宗教による区別を強化するに与って力があったのです。）

③最後に、十世紀以降の第三段階においては、彼らはヘレニズム的思想に想を得つつ、自らの著作を著すようになります。これは医学・哲学の分野において当てはまることで、やや程度は劣りますが科学の分野についても

当てはまります。この断面こそが、アラブ文明への彼らの貢献度を測る上で示唆するところが最も多いものなのですが、しかしこれは最も知られていない面でもあります。

④ついでに述べておくと、数世紀後マロン派の人々が、十七世紀から十九世紀にかけて、西欧文化に対して同じ仕方で対処することになります。つまりまず翻訳し、次いで註釈を施し（出典を必ずしも明らかにしていませんが）、そして最後に自ら直接に著作するというふうにしてです。これはいつの時代・地域にもありふれた、あらゆる異文化受容の現象の通常のやり方なのです。

四　三人のキリスト教徒に師事したアル・ファーラービー

アラブ哲学で「第二の師」と呼ばれる人、訳せば「第二のアリストテレス」「新アリストテレス」とでもなるだろうアル・ファーラービーは、八七二年にトルキスタンのファーラーブ近郊に生まれ、若くしてバグダードに来ました。

哲学について彼が師事した三人の師はいずれもネストリオス派のキリスト教徒でした。第一に彼が赴いたのはメソポタミア北部の小都市ハッラーンで、同地でネストリオス派の医学者・哲学者イブラーヒーム・アルマルワズィー（その名が示すように、マルウ[1]の出身）の教えを受けました。彼の死後、哲学の教師として後継者となったのはヤフヤー（或いはユーハンナー）・ブン・ハイラーンという別のネストリオス派キリスト教徒で、彼は九〇八年より以後にマルウからバグダードに移動しています。次いでこの人が亡くなると、学校は閉鎖されます。アル・ファーラービーはバグダードに行き、またもやネストリオス派の哲学者、アブー・ビシュル・マッター・ブン・ユーヌスに師事しその講義を聴講します。彼のアリストテレス註釈が我々のもとにまで伝えられています。

師のアブー・ビシュルがバグダードで九四〇年に亡くなった時、アル・ファーラービーはもはやこれ以上学ぶ必要はない、教育は完璧にうけたと思って、バグダードに留まる必要を感じませんでした。そこで、ハムダーン朝の君主サイフ・アッダウラが九四二年に彼を宮廷に招いた時、ファーラービーはバグダードを去ってアレッポに行ってそこで暮らし、九五〇年にダマスクスで死にました。

C　黄金時代――成熟の時代

一　アブー・ザカリヤー・ヤフヤー・ブン・アディー

バグダードでの勉学の間、アル・ファーラービーは今日で言えば家庭教師とでも呼べるようなことをしており、教え子の中にはヤコブ派のキリスト教徒でシリア語話者である、三十歳年下のヤフヤー・ブン・アディー（八九三―九七四）がいました。後者は同時にアブー・ビシュルとファーラービーとの弟子になったというわけです。

九五〇年にアル・ファーラービーが死んだ後、ヤフヤー・ブン・アディーはイスラム世界における哲学の師となりました。彼は哲学の諸問題を解くために各地から依頼を受けます。彼が遺した著作はおよそ百と、相当な量ですが、その中に、彼の大部分の著作と同様あまり知られていないものとして数学と幾何学に関する小著があります。この著書の註釈者は、ヤフヤー・ブン・アディーが区分求積法の考えを最初に構想した人物であるという

事実を強調しています。西欧で同じ方法が用いられるようになったのは六百年後で、ガリレオを嚆矢としています。

ヤフヤー・ブン・アディーはほどなくバグダードのアリストテレス派学校の長となります。この学校は中世において最も有名な学校で、なお一世紀間存続し、師ヤフヤーの著作、並びにさらに「師」そのものであるアリストテレスの著作を我々に伝えてくれている大変偉大な哲学者たちを輩出しています。（上述のように）その哲学者たちのうち六人はイスラム教徒、四人はキリスト教徒でした。

二　宗教横断的アラブ人文主義の誕生

①ヤフヤー・ブン・アディーの生涯のうち、次のディーテイルは意味深いものです。すなわち、十世紀の第三四半世紀には、哲学に関心を抱くイスラム教徒はキリスト教徒より大勢いましたが、彼らは皆ともに学んだのです。

その意味するところは、キリスト教徒はもはやヘレニズム文化を独占していない、ということです。キリスト教徒はもう一・二世代の間、師であり続けますが、ほどなくして、とりわけシリア語圏の人々が行なった翻訳のおかげで、そういったすべてのギリシア語テクストがアラビア語で読めるようになると、イスラム教徒が彼らにとって代わります。この状況は、九五〇年ごろにはバグダード及びイラクではキリスト教徒はもはや多数派でなく、イスラム教徒が数において上回ったという、人口構成上の新たな現実の反映でもあります。

②他方で、キリスト教徒とイスラム教徒は互いの弟子であり、同じ文化を共有していました。ヤフヤー・ブン・アディーが生計のために、タバリーの著になる（コーランについての）大註釈（今日カイロで出版されているものは三十巻に及びます）を二度書写したことを指摘しておくのは、無意味でないでしょう。ユダヤ人もまた、哲学においてキリスト教徒やイスラム教徒の弟子でした（たぶん、医学のような他の諸分野においても）。

③かくて、アラビア語を媒体とする新たな世界的文化が徐々に形成されていきます。その土台は、シリア語圏の人々によって改訂・訂正を施されたところの、ギリシア思想です。この新たな文化は世界的なものだと称してよいでしょう、知的に見て当時西欧は蒙昧のうちにあったのですから。アラブ世界の弟子であった西欧がいくつかの領域で科学・文化の形成の先頭に立つようになるにはもう三、四百年を待たねばなりません。

実際、十字軍士たちが我々の地域にやってきた時、彼らはアラブの科学に驚嘆します。逆に、アラブ人は十字軍士たちの無知、とりわけ医学に関する彼らの無知を嘲笑します。そういうわけで、アラブの歴史家たちは十字軍士たちの文化的欠陥に多くの紙数を割き、彼らの野蛮さと、軍事的優越性、戦いにおける勇敢さとを強調しています。

④西欧はこの時、この文化的財宝を獲得する重要性を推し量り、ヴィエンヌ（フランス）の公会議（一三一一―一三一二）において、集まった司教たちはすべてのカトリック大学（ボローニャ、パリ等々）でアラビア語を教えるよう求めることを決定します。実に、後にルネサンスにおいてギリシア語の重要性が見いだされたのと同様に、また今日英語がコミュニケーションの不可欠な手段とみなされているのと同様に、アラビア語は文化と科学の言語とみなされたのです。

三　新たな「地中海」文化の創出

①バグダードを起点にそのような動きは継続し、イスラム教徒に科学を伝えたキリスト教徒が伝播の担い手となります。ここにおいて、イスラム世界のすべての中心都市に共通の文化、宗教的な意味で「教派横断的（宗教横断的）」と称しうる文化が広まることになります。こう称してよいのは、この文化が、様々な宗教共同体に属するイスラム帝国臣民たちの共同作業だったからです。

実際、キリスト教徒がパイオニアとしてギリシア古典の遺産を自らのものとし伝達していったことには異論の余地がありませんが、彼らだけがそれに関心をもったかと言えば、決してそうではありません。他の諸宗教共同体も、この文化の形成にかかわっています。

例えば数学の分野では、知識の伝達を担ったのはハッラーンのサビア教徒たちです（コーランで言及されている、洗礼を実践したキリスト教的色彩の小宗派たるサビア教徒とは全く無関係）。自分たちの宗教的伝統から発して、彼らは特に数学と天文学とに興味を持ちました。

医学の分野では多くのユダヤ人たちがその学識を以て聞こえていました。例えば、サラーフ・アッディーン・アルアッユービーすなわち（一一七一年から一一九三年までスルタンだった）大サラディンの侍医だったのは、かのアブー・イムラーン・ムーサー・ブン・マイムーン（ラテン語名マイモニデス。西洋の思想に影響を及ぼした人物）でした。彼は一一三五年にコルドバで生まれ、フェスのムラービト朝の君侯アリー・ブン・ユースフ（一一〇六―一一四二）を逃れ、サラディンのいるカイロに逃れて、同地で一二〇四年に亡くなります。当時のアラブ世界のすべてのユダヤ人と同様、彼の著作は基本的にアラビア語でなされ（特別に宗教的な論考はヘブライ語で著されましたが）、次いでヘブライ語に翻訳されています。

②また、アンダルシアに生きたスペインのキリスト教徒たちも九世紀以降アラビア語で著作するようになったということも指摘しておきましょう。例えば、近代以前に行なわれた詩篇の韻文訳で唯一現存するのは、十世紀にハフス・ブン・アルバル・アルクーティーが行なったものです。

この名前はそれ自体で一個のプログラムを表していると言えます。ハフスとは北アフリカでは有名な名であり（のち一二二八年から一五七四年までチュニジアで支配するハフス朝を思わせます）、イブン・アルバルとは今日で言えば、よく見られる名であるアルバレスに対応するでしょう。アル・クーティー（アル・グーティーと発音しなければなりません）とは、四一五年にヴァンダル人（アンダルシア、アンダルスという名はこれに由来します）を蹴散らしてスペインに定着した西ゴート人を表す由来名（ニスバ）です。

イブン・アンバルは詩篇をラテン語からアラビア語の韻文に訳していますが、その際、聖ヒエロニュムスがラテン語訳（ウルガタ）で行なったように、各詩篇をキリストに当てはめるキリスト的導入部を付け加え、詩篇をキリスト教化しています。

四　文化の道具としてのアラビア語

①アッバース帝国の首都バグダードにおいて、近代的と称してよいアラビア語が鋳造されました。こう言ってよいのは、この言語が当時のあらゆる学問を包含しうるものだった

からです。

フナイン・ブン・イスハークがガレノスの著作のアラビア語訳にとりかかった時、彼が直面したアラビア語は貧弱な言語でした。ギリシア語原文を訳すのに彼はギリシア語・シリア語・ペルシア語の単語を使わざるをえず、それによってアラビア語を相当程度豊かなものにしました。この点は彼自身、自著の一つで強調しており、彼はシリア語と比べてアラビア語を、学術用語レベルでのその不十分さを強調して批判しています。

一世紀半の後、ニシビスのイーリーヤー（イーリーヤー・ブン・シーナー）はアラビア語の語彙の批判をさらに突き進め、ライオンやらくだを指す語が五百あると言って自慢する人々に答えて、アラビア語が医学や処方薬の用語で貧弱であることを指摘しています。

②これら著者たちは多言語を使えたので、問題をよく理解していました。実際、或る言語の豊かさと近代性とは、その言語が多数の同義語を有するという点に存するのではなく、それが世界の文化のあらゆる概念、あらゆる現実を表現することができる、という点に存するのです。

今日、かつてないほどに、この問いが我々に対して提起されていると言えます。すなわち、我々が日常生活で使いまた目にするすべてのことをアラビア語で表現することは可能なのでしょうか？　一例にとどめると、情報処理の分野で今日アラビア語を使って仕事をすることは、どの程度可能なのでしょうか。もちろん、専門家の中には、この分野で三ヶ国語の語彙をつくる努力をした人々もありますが、しかしその努力は、一般大衆はおろか、教養ある階層によっても、受容されたと言うにはほど遠い有様です。

この問いの後ろに控えているのはアラブ文化の現代化という大変深刻な問題であり、シリア語・アラビア語を使った中世の我らが著者たちはこの問題をよく認識していました。刷新を欠くがために（緩慢にしかし着実に）死滅していく、そのような死語にならないためには、言語は新たな技術に適応してつねに自らを豊かにしていかなければならないのです。

③アッバース朝時代のキリスト教徒は、科学や技術に関して当時存在したあらゆるものを表現するために必要な、幾千もの用語や術語的表現を、アラビア語に取り込むことに成功しました。しかし、キリスト教徒は次第に少なくなりイスラム化していき、それによって彼らの影響力は小さくなり、十二世紀以降には取るに足らないものになります。

五　イスラム教徒による継承

今やイスラム教徒は（キリスト教徒が行なった事業を）引き継ぐ用意ができていました。そのことは既に九世紀の初頭、ムハンマド・ブン・ムーサー・アルフワーリズミー（八四九年没）が証ししていると言えます。彼の名はラテン語化して、アルゴリズムという単語をもたらしました。

ところで、西欧の諸言語の数学・天文学の用語の多くがアラビア語に由来していることを我々は目にします。例えば「数字（フランス語のシフル）」「アルゴリズム」「方位（azimut）」、また未知の数を表すのに使うxもそうです。周知のようにアラブの学者は、求める未知数を「もの（シャイ）」という語で表現し、これは中世の写本ではﺷﻲﺀで表されました。これらテクストがスペインでラテン語に翻訳された時、それは自然とxで訳され、そしてその表記法が世界の文明に広まったの

です。今日アラビア語では我々はʿaと書きますが、これは、十世紀には（写本上で）まだ点が書かれておらず、ようやく十四世紀になって、この種のあらゆる点が写本上で系統的に用いられるようになったからです。

かくて、栄光の時代にはアラブ文化は、数学の記号に至るまで、世界の文明に足跡を残したことがわかります。

D　最後の息吹と衰退

一　衰退の端緒

イブン・ハルドゥーン（一三三二―一四〇六）は、様々な文明がどのようにして成長し、次第に発展してついに極致に至り、次いで衰退し、社会のブルジョワ化という現象によって消え去っていくか、ということを示しています。

実際、バグダードは一二五八年、モンゴルのフラグ・ハーン（一二六五年没）の攻撃によって陥落します。その間にカイロが、ファーティマ朝によって九六九年以来バグダードから独立し、さらには一一七四年以来アイユーブ朝を擁して、後を継いでいます。

再興が実際に行なわれるのは最初のバフリー・マムルークたち（一二五〇―一三八一）によってであり、彼らは軍人でありトルコ人でしたが、アラブ文化を見事に継承して見せます。次いでブルジー・マムルーク（一三八二―一五一六）は十五世紀に至るまでこの動きを継続しますが、それ以降衰退が兆しそして定着し、オスマン帝国によるアラブ世界の征服（一五一六―一五一七）へと至ります。

二　百科全書

十三世紀は百科全書の偉大な世紀であり、過去の数世紀の遺産がまとめられます。この現象はキリスト教徒のもとでは、より早く十一世紀に始まっており、例えばネストリオス派のアムル・ブン・マッターの『塔』、ヤコブ派のヤフヤー・ブン・ジャリールの『手引き』という二つの大部な、イラクで成立した百科全書があります。

この動きが頂点に達するのは十三・十四世紀のコプト人のもとにおいてで、ムアタマン・アルダウラ・ブン・アルアッサール（人名）のコプト版『神学大全』、ユーハンナー・ブン・サッバーの『高価な真珠』、シャムス・アルリヤーサ・アブー・アルバラカート・ブン・カバル（一三二四年没）の『闇の中のランプ』といった大著が例えば挙げられます。このことは、キリスト教的アラブ文化が次第に消滅しつつあることをキリスト教徒が自覚し、それゆえに、百科全書のうちにそれをまとめ上げる必要性を感じたことに由来しています。

十四世紀にもなおいくつかのものがまとめられますが、しかしそれらは、単にキリスト教徒によるものとしてだけでなく、アラブ思想一般という観点から見ても、最後のものと言ってよく、そしてこの後者（アラブ思想）の関連で、歴史哲学者・社会学者の先駆けだったチュニジア人イブン・ハルドゥーンに特に言及しなければなりません。

十五世紀について言えば、幾人かの注目すべき人物に言及すべきでしょう。とりわけ、イスラム教徒で有名な百科全書家（アシュート（地名）の）アルスユーティー（一五〇五年没）は、地震、コーランの註釈、言語学、哲学、論理学、数学、あらゆる学問分野について、数百もの著作を著しました……共通の遺産をまとめ上げるほかに新たなものをもた

らしたと僭称してはいませんが。

（十八世紀のフランスの「百科全書家」と異なり）それまでのものをまとめたにすぎないこの種の百科全書的な産物は、衰退の時代をよく表していると言えます。

アラブ文学の教科書がよく言う言い方ですが、この「衰退の時代」の衰退傾向は、シリアを二五八年間占拠してきたマムルークを追い出したオスマン帝国の侵攻によって、さらに拍車がかかります。この出来事は、アラブ世界の衰退を促進するものでしかありませんでした。この地域の人々が奮起へと立ち上がるきっかけは別のところから、すなわちルネサンスの只中にあった西欧から、来ることになります。このルネサンスをより仔細に検討する必要があります。特にキリスト教的観点からです、というのも、東方への影響がまず見られるのはこの次元においてだからです。

E　知的ルネサンス――イタリア及びヨーロッパにおける古代の再発見

いわゆるルネサンスとは、仏語辞典 Petit Robert の定義によれば、十五世紀以降まずイタリアで、次いでヨーロッパ全体で、ギリシア・ラテンの古代の思想・芸術への回帰という考えによって惹起された知的大発展です。同じ事典の第二巻は次のように定義しています。「十五世紀及び十六世紀の一部にわたった広範な文化運動に与えられた名。この運動は封建性と結びついた中世的諸価値をはっきり放棄するものであり、そして他の様々な特徴とともに、ヨーロッパ文明の中に古代の諸価値を再生させるという特徴を有した」。

活版印刷術と両面印刷の可能なインクとをグーテンベルク（一四六八年没）が発明したことによって、この運動は大きな広がりを有するに至りました。グーテンベルクは木版を活版に変え、印刷技術を改善しました。ヨハネス・フストに訴訟で負けて、「四十二行聖書」を一四五七年ごろ手放さざるをえなくなりますが、マインツ大司教によって貴族に叙せられ、彼は仕事を再開することができました。この発明の結果、爾来ヨーロッパ全体に知識の普及が可能となりました。

一　イタリアにおけるルネサンス

①疑いなくイタリアにおいてこそ、最も明確な形でルネサンスは（古代、特にギリシア世界の再発見として）日の目を見たと言えます。トマス・アクィナスのように有名な思想家ですらギリシア語を知らなかった、ということが想起されるべきでしょう。彼がアリストテレスについて有した知識はアラブ人経由で、とりわけ、西方におけるアラブ文化の最も偉大な人物の一人だったアヴェロエス経由で入ってきたのです。アヴェロエスは今日に至るまで、イスラム世界・アラブ世界にとって近代性の象徴であり続けています。

②芸術については、教皇たちはこれを大いに奨励し、大勢の人の顰蹙を買います。特に彫刻を奨励し、この関連では特にミケランジェロ（一四七五―一五六四）が有名です。

レオナルド・ダヴィンチ（一四五二―一五一九）にとっては絵画こそが、自然を映す魔法の鏡として芸術の頂点でしたが、ミケランジェロにとってはその役割を果たすのは彫刻でした。彼は魂の救済を自らの知的・芸術的活動の中心に据え、ギリシア的（特に新プラトン主義的）知恵とキリスト教的信仰の統合をつねに目指しました。

彫像に重要な位置が与えられたことで、教

会芸術は重要な一段階へと踏み出しました。また、それは信仰の新たなビジョンを表しています。というのも、その時まで優位を占めていたのは唯一イコンだけだったからです。教皇は、裸体の彫像（後に恥じらいから覆いをかぶせられますが）を含めて、彫像芸術を奨励することになります。

かくて、ルネサンス（再生）と称される新たな生が兆し始め、西欧は古代ギリシア文化を再発見します。

二　フランスにおけるルネサンス

①フランスでは、哲学者・神学者・人文主義者だったジャック・ルフェーヴル・デタープル（一四五〇―一五三七）が、聖職者の改革と聖書の普及とのために働きました。聖書の最初のフランス語訳の一つ（一五三〇年）とアリストテレスの複数の著作の翻訳（一五〇一―一五〇三年には『オルガノン』を刊行しています）は彼によるものであり、また聖パウロの書簡の註釈や四福音書の註釈も著しています。

②同じくフランス人で、ジャン・カルヴァン（一五〇九―一五六四）の師だった注目すべきギリシア語学者、碩学のギヨーム・ビュデ（一四六七―一五四〇）は、ギリシア語写本の入手のために人々を派遣し、そしてフランソワ一世から一五三〇年にコレージュ・ド・フランスの創設をかちえます（これは一五三四年には「三つの言語（ギリシア語・ヘブライ語・ラテン語）のコレージュ」となります）。そして彼はキリスト教との関連で見た古代文化のために一講座を確保し、そして一五三五年に『ギリシア文化からキリスト教への移行』を著し、その中で、文学研究への愛はキリスト教の真理をより良く理解する助けになるという自らの信念を述べています。既に一五〇七年以来、彼はプラトンのフランス語訳を手がけています。

ビュデは、穏健かつ慎重な思想家だったフランドルの偉大な人文主義者デジデリウス・エラスムス（一四六九―一五三六）と文通をしています。すべての古代愛好家が師と仰ぐこととなるエラスムスは、古代人の研究と福音書の教えとを調和させようと努力しました。

③ロベール・エティエンヌ（一五〇三―一五五九）は一五二四年に義父の印刷工房を切り盛りすることになり、一五三九年には王室御用印刷者となります。彼は一五二八年から一五四六年にかけて聖書をラテン語・ヘブライ語・ギリシア語で出版しました。『ラテン語の宝庫』（一五三九年）を著し、人文主義者・編集者として知られ、一五五〇年にはプロテスタンティズムに改宗しました。今日聖書で用いられている節区分を最初に導入したのは彼でした。

ギヨーム・ポステル（一五一〇―一五八一）は東洋学者で、コレージュ・ロワイヤル（現在のコレージュ・ド・フランスの前身）でギリシア語・ヘブライ語・アラビア語を教えました。しばらくして後にイエズス会士となり、その著『世界和合論』の中でイスラム教徒とキリスト教徒の和解を説きました。

ジャック・アミョ（一五一三―一五九三）はプルタルコスを翻訳し、人をして人文主義者たらしめる三つの言語、すなわちラテン語・ギリシア語・ヘブライ語を同様に使用しています。因みに、このことから明らかなように、ルネサンスは、非キリスト教的ギリシア古代へと回帰しながらも、決して聖書的伝統を否定してはいませんでした。

三　ルネサンスと諸科学

①医学の分野では、ジュリオ・チェザーレ・スカリジェロ（一四八四―一五五八）は文学作品を著しただけでなく、ヒッポクラテス、アリストテレス、テオフラストスに関する科学的著作をも著しました。スイス人フィリップス・パラケルスス（一四九三―一五四一）は医学を完全に刷新しました。彼はバーゼルで教え、ガレノスとアヴィセンナを批判しました。

②ポーランド人の聖堂参事会員ニコラウス・コペルニクス（一四七三―一五四三）とともに、関心は天文学にも及びます。コペルニクスはその著『天球の回転について』で、プトレマイオスの天動説を玉座から引きずりおろし、代わりに地動説を据えることで天文学を革新しました。二人の遠方の弟子が彼の研究をさらに推し進めます。力学及び天文学の多くの法則を見出したイタリア人ガリレオ（一五六四―一六四二）と、大変若くして『宇宙の神秘』（一五九六年）を刊行し、そこで述べた三つの法則によって天文学の研究に深い足跡を残したヨハネス・ケプラー（一五七一―一六三〇）です。

③地理学も長足の進歩を遂げます。新たな土地の発見（その前提となるのは星辰の研究、羅針盤の使用、等々です）はこの時代の人々に新たな地平を開きました。これは、プトレマイオスの『地理学』を学んだ後アメリカを発見したクリストフォロ・コロンボ（一四五一―一五〇六）と、一四九七年に喜望峰経由でインド亜大陸へのルートを発見したヴァスコ・ダ・ガマ（一四六九―一五二四）という偉大な航海者たちによっています。世界は地中海とヨーロッパにはもはや限られません。両アメリカ大陸は今や、民族誌学者や歴史家をも引き寄せる新たな現実なのです。

四　スペインにおけるルネサンス

①芸術・文芸・科学の分野でヨーロッパをリードしたのが、疑いなくイタリア、次いでフランスとドイツであるとするなら、政治の分野で支配的だったのはスペイン、次いでポルトガルでした。

十五世紀末のカトリックのスペインにおいて、一つはその領域内で、もう一つはその領域外で、起こった二つの重要な事実があります。

すなわち一方で、十三世紀以来、フェルディナンド三世（一一九二―一二五二）によるコルドバの征服（一二三六年）とともに始まり、スペインのムーア人を次第に駆逐することとなったレコンキスタの運動は、いわゆる「カトリック両王」たるアラゴンのフェルディナンド二世（一四五二―一五一六）及びカスティリャのイサベル（一四五一―一五〇四）の治下、一四九二年のグラナダの占領で完結しました。

他方で、同じく彼らの治下、アメリカの発見が行なわれ、それによってカトリック教会の勢力伸長、宣教の拡大、及びヨーロッパの隆盛が起こり、その中でスペインとポルトガルは主要な位置を占めます。

②スペインでは、十六世紀初頭における最も有名な人文主義者は疑いなくファン・ルイス・ビーベス（一四九二―一五四〇）でしょう。彼はラテン語で著作しました。一五一九年に（ブラバントの）ルーヴァンで教授に任じられ、彼はソルボンヌのスコラ学に対する才気走った攻撃文書『似而非弁証家批判』を公刊しています。一五二三年に彼はオックスフォードに招かれ、ヘンリー八世の宮廷で王

妃キャサリンのお抱え教師、将来のメアリー一世の家庭教師となりました。そこで、キリスト教的女性の教育についての著作（一五二三年）と、夫の務めについての著作（一五二九年）を著すこととなりました。一五二六年にはトルコに関する本を二冊著しています。『ヨーロッパの紛争とトルコの戦争について』と『トルコの圧政下におけるキリスト教徒の生活条件』です。一五二九年には平和に関する本が二冊、『人類における一致と不一致について』と『平和を作り出すことについて』です。一五三八年には人間の心理に関する透徹した論考『生命と魂』を刊行し、死後に出版された『キリスト教の信仰の真理性』を最後の著作として遺しました。ビーベスはベイコンやデカルトの先駆者とみなされ、十七世紀にジョン・ロックによって引き継がれることとなる経験論の流れの前触れとなりました。

③厳律フランシスコ会士のフランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロス（一四三六―一五一七）は修道院と聖職者とに対して強力な改革を突きつけました。トレドの司教（一四九五年）として、宗教的無知と戦うためにアルカラの大学を創立し（一四九八年）、そこにサラマンカやパリから教授を招き、ギリシア語やヘブライ語を教えさせました。一五〇七年に枢機卿・大審問官になると、彼はスペインでの免罪符の使用を禁止し、Complutensisと呼ばれる多国語聖書（ヘブライ語、カルデア語、ギリシア語、ラテン語）の編纂を組織しました（アルカラで一五一七年から一五二二年にかけて計六巻で刊行されました）。

④一五二六年、司教代理アロンソ・フェルナンデスは、大審問官アロンソ・マンリケ（一五三八年没）の庇護のもと、エラスムスの『キリスト教兵士提要』をスペイン語に翻訳しました。これは出版上多大な成功を収め、一五二七年三月にはバリャドリードで国民的大議論を惹起するに至ります。ここでエラスムスの考えが勝利し、その結果、一五二七年十二月十三日、カール五世が自らエラスムスに宛てて手紙を書きました。このことは、スペインの知識人の間でのエラスムスの重要性を裏書きする出来事でした[2]。

次世代には、幾人かのビッグネームが輝き渡ります。ドミニコ会士で、法学者・神学者だったフランシスコ・デ・ビトリア（一四八三或いは一四九二―一五四六）は一五三九年に、インディオに対する征服との関連で「義戦」に関する注目すべき省察を行なっています。イエズス会士で神学者だったフランシスコ・スアレス（一五四八―一六一七）は、一五八〇年のローマでの最初の講義に教皇グレゴリウス十三世が列席したというほど、また教皇パウルス五世からイギリスの王ジェームズ一世（一六〇三―一六二五）の誤謬を論駁するよう依頼されるほどに、名声を博しました。劇作家ロペ・デ・ベーガ（一五六二―一六三五）はフランス及びヨーロッパ全体に影響を及ぼしました。さらに、ドン・キホーテの著者、小説家ミゲル・デ・セルバンテス（一五四七―一六一六）、画家エル・グレコ（一五四一―一六一四）がいます。

F　宗教的ルネサンス――トリエント公会議（一五四五―一五六三）

このような知的なものとしての「ルネサンス」（この語を鋳造した十九世紀の人々の目に映ったルネサンスとはそのようなものだったのですが）は、私の考えでは、もっと遥かに豊かな当時の現実を正しく言い表していま

せん。実際、非キリスト教的ギリシア・ラテンの古代への回帰と並んで、プロテスタンティズムの抗議から刺激を受け、しかしながら最終的には教皇たち及びこの十六世紀の数十人の偉大なる聖人たちによって担われることとなった、真の知的・霊的再生（ルネサンス）があったのです。オリエントにとっては、この第二の次元こそがより注目すべきものでした。簡潔にであれ、それを素描しなければなりません。

一　カトリックの改革とトリエント公会議（一五四五―六三）

①十五世紀末そして十六世紀、カトリック教会はあまりぱっとしない状況の中にあり、改革を必要とし、誰もがそれを願っていました。堕落は教皇のうちの幾人かにまで及びました。ラテラノ公会議（一五一二年）で教会は、自ら改革を行なえないことが明らかになりました。その反動で幾人もの「改革者」が現れます。特にマルティン・ルター（一四八三―一五四六）の動きは、キリスト教徒の間で深刻な内紛と、（プロテスタント運動を生み出すことで）西欧の教会において最も深刻な教会分裂とを、惹起することになります。

ルターが起こした波乱と、それに起因する反教皇運動とは、反宗教改革、より正確にはカトリック改革を生み出しました。これはパウルス三世（一五三四―四九）とともに始まり、ユリウス三世（一五五〇―五）、パウルス四世（一五五五―九）、ピウス四世（一五五九―六五）、ピウス五世（一五六六―七二）、グレゴリウス十三世（一五七二―八五）そしてシクストゥス五世（一五八五―九〇）によって継続されました。パウルス三世はトリエント公会議（一五四五―六三）を召集しましたが、残念なことにルターは数ヶ月後に亡くなり、公会議の結果を共有することはできませんでした。

②トリエント公会議はカトリックの教義のすべての基本的な点を再検討し、また教会のあらゆる制度を再検討することを指向していました。

教義の大部分の点が検討され再定義され、礼拝の仕方（秘跡、マリア及び聖人に対する崇敬、画像）が再確認されました。司祭の独身、任地たる教区に司教が居住するべきこと、司教座の兼任の禁止など、規律が再興されました。

聖書の正典が確定され、聖ヒエロニュムスのラテン語訳ウルガタ（ベツレヘム、三九〇―四〇五）を基とし、シクストゥス五世が確定しクレメンス八世が改訂した聖書の公式の版を準備することが決まりました。

この時期に著されたのは、公教要理（一五六六年）、聖務日課書（一五六八年）、ローマ・ミサ典礼書（一五七〇年）、ピウス五世のもとで着手されグレゴリウス十三世によって発布されたカノン法の集成です。ピウス四世及びシクストゥス五世のもとでローマ聖庁も改革されました。最後に特に、神学校や神学院が創設されました。

これら改革の大半が、宣教師を媒介として、またローマで教育を施されたマロン派の聖職者を媒介として、次の世紀には東方キリスト教圏に直接的な影響を及ぼすことになります。

③この時代には非常に多くの偉大な聖人が生まれ、彼らは特にイタリアとスペインでカトリック教会を内側から変えていきます。

イタリアではアンジェラ・メリチ（一四七四―一五四〇、ウルスラ会の創立者）、ガエターノ・ダ・ティエネ（一四八〇―一五四七、一五二一年にテアティノ会を創立）、アント

ニオ・マリア・ザッカリア（一五〇二―三九、一五三〇年にバルナバ会を創立、また聖パウロ童貞会を創立）、フィリッポ・ネリ（一五一五―九五、オラトリオ会の創立者）[3]、カルロ・ボロメオ（一五三八―八四、ピウス四世の甥にして秘書）、ロベルト・ベラルミーノ（一五四二―一六二一）、そしてアロイシウス・ゴンザーガ（一五六八―九一）[4]といった人々がいました。

スペインではイグナティウス・デ・ロヨラ（一四九一―一五五六、一五三四年にイエズス会を創立、一五四〇年に認可を受ける）、アビラのテレサ（一五一五―八二、カルメル会の改革者）、十字架のヨハネ（一五四二―九一、カルメル会の神秘主義者）といった人々がいました。

ヨーロッパ全体でも、例えばオランダ人ペトルス・カニシウス（一五二一―九七）のような改革者聖人が現れています。

二　教皇グレゴリウス十三世（一五七二―八五）の役割

①トリエント公会議とカトリック改革の結果がどうなったかというところへ話を戻しましょう。私の考えでは、決定的な推進力を与えたのは教皇グレゴリウス十三世ですが、彼の役割は少々誤解されています。彼は宣教を発展させ、教皇大使の数を増やしています。また、ピウス五世が着手したカノン法の集成を刊行しています。

彼の教皇在位期間における主要な力点は、ローマを知的首都にしようという彼の意図にありました。この目的のために、一五七七年に彼はドミニコ会の神学院をアンジェリクムという名で大学に格上げしています。さらに、遥かに重要なのは、イエズス会のローマ神学院（聖イグナティウス・デ・ロヨラによって一五五一年に創立されました）を一五八五年にグレゴリアーヌムという大学にしていることです[5]。この大学では、主としてイタリア人及びスペイン人の著名なイエズス会士たちが、大変質の高い教育を施していました。この学校はカトリック大学の中で最も有名なものとなり、今日でもなお、世界中の多くの司教を輩出しています。

②一五八二年に教皇グレゴリウスは、グレゴリアーヌムのイエズス会士の数学者たち、とりわけクリストフ・クラウ（いわゆるクラーヴィウス。バンベルク一五三七年―ローマ一六一二年）の作業のおかげで、いわゆる「ユリウス」暦の改革を公布しました。これが有名な「グレゴリオ暦」で、十日間を削って、一五八二年の十月四日から十五日に飛ぶというものでした。

教皇は、それまで一般にイエズス会士に限られていた多くの神学院（コレージュ）を創立・再組織して、そこで教育した司祭たちをプロテスタント諸国へ送り出します。ドイツ神学院、ハンガリー神学院、イギリス神学院といった神学院がこれに当たります。また正教会のことも念頭に置き、教皇はロシアの宮廷に及ぶほどの非常に活発な外交活動を展開し、同時にギリシア神学院を創立します。爾来、ヨーロッパの聖職者のエリートはローマで教育を受けることを志し、こうして教皇たちは優れた神学者たちを自らの周囲に擁するようになりました。

後に見るように、この最後の点が十九世紀のアラブのナフダ（覚醒）にとって枢要な意義を有します。実際、新たな種類の神学校の創設や、また教育面で多大な経験を有したイエズス会士の指導下にあったこれら神学院は、

十七・十八世紀に宣教師たちによって近東に創設される神学院、すなわちアラブ・ルネサンスの芽が出る苗床となるそれら神学院のモデルとなるのです。

三　ジャンバッティスタ・エリアーノと東方の諸教会

①しかしこれらの計画の中で、近東は未だあまり重要な位置を占めていません。そこで、グレゴリウス十三世は使節の一人を送って、東方の諸教会との交渉を始めることにします。

当時、イタリアにはラビの名家の出身であるアレクサンドリア出のユダヤ人がいました。彼はカトリックに改宗してイエズス会に入り、聖イグナティウスの時代に受け入れられ、ジャンバッティスタ・エリアーノという名を得ました。

ジャンバッティスタ・エリアーノは一五六一年、クリストフォロ・ロドリゲスとともにまずエジプトに派遣されます。アレクサンドリア生まれなので、エリアーノはエジプト方言のアラビア語を話しました。この最初の旅行ではコプト教会との関係をつくるには至らず、エリアーノは一五六三年ヴェネツィアに戻ります。そして教皇ピウス四世の依頼で、一五七七年までローマ神学院でヘブライ語とアラビア語を教えます。しかしエリアーノはカルデア語（すなわちシリア語）も知っていました。

②それから彼はレバノンへ送り込まれます。最初はイエズス会士のジャンバッティスタ・ブルーノとともに一五七八―九年に行き、二度目に行ったのは一五八〇―二年にかけてでした。同地には、霊的に見て、またあらゆる観点から見て、ローマ（すなわちカトリック教会）に非常に近いキリスト教徒がいました。マロン派です。一五八〇年六月二十九日トリポリに着いて、彼はマロン派の教会会議が開かれるよう働きかけます。そしてそれはカンヌービーンで同年八月十五日から十七日まで開かれました。

少しずつ、彼の頭の中で計画が形を成していきました。マロン派は中東における唯一のカトリック教会なので、これが東方のカトリック勢力の中心となるよう手助けしなければなりません。しかしその困難な現状に鑑み、エリアーノは、ヨーロッパ北部の諸国向けに作られた様々な神学院の例に倣って、若い神学生の教育のためにローマにマロン派の神学院をつくるという素晴らしいアイディアを思いつきました（これは教皇グレゴリウス十三世の認めるところとなりますが、簡単には事は運びませんでした[6]）。

③同時に、トリエント公会議の決議に従って、彼は単性論的含意を有する書物（典礼書や神学書）を排除することを決めます。というのも、レバノンの山地においてはヤコブ派のシリア人は依然脅威だったからです。

そこで彼は北へ赴き、特にハスルーンの地方で、困難な状況下に生きる多くの若い人々に会いました。オスマン帝国による占領の時代だったのです。ほどなくしてエリアーノはキュプロスに行き、そこにおいて、遥かに自由でかつギリシア化した、また、ギリシア語を話しアラビア語とシリア語も少々話す、そのようなマロン派の共同体に出くわします。さらにエリアーノは、キュプロスから相当数の文書をイタリアに持ち帰って、中東の状況に関する報告書を書き上げました。

④こうして（レバノン北部の山岳地帯とキュプロスから）ローマに、まだ青年期にある若者が招来されます。彼らはローマで勉学を

し、芸術であれ科学であれ、あらゆる新しい分野について手ほどきを受けました（ローマではルネサンスが真っ盛りでした）。彼らは特にラテン語・イタリア語など諸言語を学び、また、当時キリスト教徒の間で一般に極めて不十分なものだったシリア語及び古典アラビア語の知識に磨きをかけました。中にはギリシア語やフランス語を勉強する者も現れました。グレゴリアーヌム大学で哲学と神学の講義を聴講し、ルネサンスの文化に目覚めることとなります。

⑤コプト教会との合同を今一度試みるべく、エリアーノは再度エジプトに向かい（一五八二―五）、今回は（一五七八年以来）ローマにいたシリアの「ヤコブ派」の総主教イグナティウス・ニアマト・アッラーフ[7]の励ましを受けました。しかし結果は失敗で、理由の一半はローマ側の鈍い態度にありました。果たしてコプトの総主教は、ローマとの合同に署名するその前夜、毒を盛られたらしく、亡くなってしまいます。コプト人によれば、この悲劇的な結末は神の摂理によるものであり、これによってコプト教会は、彼らの目から見て侮辱だった今回の合同から救われたのだ、と。エリアーノは一五八九年三月三日ローマで亡くなりました[8]。

G　ローマのマロン派神学院（一五八四年）

一　ローマのマロン派神学院（一五八四年）[9]

現地での事情見聞に基づいて練り上げられたエリアーノの計画は、カトリックたるマロン派をローマで教育するというものでした。「既に一五七八年、エリアーノはローマに二人のマロン派の神学生を連れてきており、彼らはローマ神学院の講義を聴講した。他の人々も一五八一年から一五八四年にかけてこれに続き、一五八四年七月五日には教皇グレゴリウス十三世はHumana sic ferunt という勅書によってローマのマロン派神学院の創立を聖別した」[10]。このマロン派神学院はギリシア神学院（一五七七年に同じ教皇が創立）、ドイツ神学院、イギリス神学院の例に倣ってつくられました。他の神学院と同様、この神学院もまた、できて間もない修道会であるイエズス会に任せられ、イエズス会はこれら新たな神学院すべてを担当しました。

レバノンの山地やキュプロスからやってきたマロン派の人々（彼らの名前、年齢、他の詳細に関するリストを我々は持っています）は西欧との遭遇に眩惑させられました。これら若いキリスト教徒たちは、自分たちの目に映ったその知的・芸術的・霊的豊かさに魅惑されたのです。既に見たようにイタリアはヨーロッパのルネサンスの中心で、イタリア人の学校に入ろうとしてヨーロッパ全体から人々がやってきていました。

かくて、我らが若き神学生たちは無我夢中であらゆる学問分野に飛び込み、数学も科学も歴史も地理学も、そして特に哲学も神学も、倫理学もカノン法も聖書釈義もいろいろな言語も学びます。もとより彼らはアラビア語とシリア語を知っており、そこでヘブライ語とギリシア語を学びます。ヨーロッパの近代語は言うに及びません（イタリア語、時にはスペイン語）。ほどなく彼らは真に小天才たちとなります。

二　最初に印刷されたアラビア語の著作――祈禱集

①マロン派のこれら若き神学生にとっては、自分たちの言葉で書かれた祈禱書が欠かせま

せんでした。死ぬ少し前、たぶんエリアーノがその一冊を著したのでしょう。これは種々取り混ぜた集成で（彼のメンタリティーがよくわかります）、一五八六年にローマで印刷されましたが、今日は散逸しています。

この集成は風変わりなものでした。つまり、聖エフレムから採ったシリア語の祈りもあれば、マロン派の伝統に属する他の祈りもあり、聖処女の連祷や特に諸聖人の連祷（というのは、当時イエズス会士は毎日諸聖人の連祷を唱えていたからです）のようなラテン語の祈りもあり、コプトの神学者ムアタマン・アルダウラ・ブン・アルアッサールが一二六〇年ごろ著作した週の七日間のための祈り（まだ刊行されていない写本から採られたものです）も入っていたのです。

この本はガルシューニー、すなわちアラビア語をシリア語文字で書いたもの、で印刷されていました[11]。当時この字体がマロン派で最もよく使われていたからです。

②これはアラビア語で印刷された最初の本ではありませんでした。アラビア語での印刷が始まったのは実際イタリアにおいてで、世界で最初に印刷されたアラビア語の本はカトリックの皇帝派用の「*Kitâb al-Sawâ'i*」という題の聖務日課書で、アドリア海沿岸のファノで印刷されています。

二年後の一五一六年には、ドミニコ会士でコルシカ島のネッビウの司教だったアゴスティノ・ジュスティニアーニ（一四七〇―一五三六）が、生まれ故郷の町ジェノアに、当時トリノに住んでいたミラノの有名な印刷業者ピエトロ・パオロ・ポッロを来させて、八つの欄から成る最初の多国語詩篇を印刷させました[12]。これに続いて聖書全体が印刷されることになっていました。第五欄に見られるアラビア語本文は、一つはエジプト起源の、もう一つはシリア起源の、私蔵していた二つの写本に基づいています。この同じ司教・東洋学者（パリでは一五一八年から一五二二年までコレージュ・ド・フランスの東洋語の講座を担当していました）は、『コルシカの描写』と『ジェノア共和国の大変正確な年代記』によって有名となりました。

この現象はなおしばらく続きます。というのも、最初期のアラビア語の本は東方のキリスト教徒の霊的必要を満たすためのものだったからです。

かくてはっきりわかるのは、最初に印刷されたアラビア語の本は西欧人の手になるものだったということで、その目的は二重でした。すなわち、東方のキリスト教徒を霊的に助ける、そして東洋学者たちのため、ということです（十六世紀に印刷されたアヴィセンナの医学書やアラビア語文法といった本がそのことを物語っています）。

三　翻訳

①アレッポやレバノンに戻った多くの若きマロン派司祭たちは、日常の教えや説教の中で、自分たちがローマで受けたものを同国人たちに伝えようと努力します。彼らは敬神・宣教（使徒的活動）の新たな形を導入し、説教を全く刷新し、修道生活を再び活発にし、西欧の修道生活というモデルにそれを合わせ、近代化します。そのような修道院が、霊的・文化的発信の中心地となっていきます。

②しだいに彼らは、自分たちがローマで学んだ本をラテン語からアラビア語へ、時にはスペイン語やイタリア語からアラビア語へと翻訳するようになります。十七世紀の宣教師たちの共通語はイタリア語でした。例えばア

レッポで、イエズス会の共同体ではフランス人の宣教師が多数を占めていましたが、彼らがローマとのやりとりで使ったのはイタリア語でした。

中には、自分たちがローマで使った教科書を訳したり、自分たちが高く評価した霊的著作を翻訳する人々もいました。

③知的観点から見て、彼らはバグダードのキリスト教徒が九・十世紀にたどったのと同じ道をたどっていたのです。すなわち彼らは翻訳し、次いで註釈し、そして最後に、西欧から想を得て独自の著作を生み出すこととなるのです。

聖トマス・アクィナスの『神学大全』のような重要な著作はすべてラテン語からアラビア語に翻訳されます。聖書も翻訳され、またフランドルのイエズス会士コルネリウス・ア・ラピデ（ア・ラピデは本名のファン・デン・ステーンの訳。アラビア語ではアルハジャリーと呼ばれました）の著になる聖書の膨大な註釈も翻訳されます。ベイルートの旧「カトリック印刷所」で印刷されたこの著作は、アラビア語で少なくとも五千ページになります。

④バトルーンの地方のトゥーラーのマロン派の司祭、ブトゥルス・アルトゥーラーウィー（一六五七―一七五四）はトマス哲学全体、つまり聖トマスが改訂したアリストテレスの哲学全体を翻訳します。この司祭はアラビア語で多くの論考を翻訳・著作し、それらはブケルケ、ダイル・アルクライム、アレッポその他の場所でなお写本の形で眠っています。アレッポで、彼はナフダの最も偉大な著作家の一人となるゲルマーノス（或いはジブラーイール）・ファルハートを教育しています。この人物については後に触れます。

四　学校と印刷所

①この運動は一世紀半を要することになります。マロン派は西欧式の学校をつくり、そしてそこでは、（イスラム教徒のマドラサやクッターブにおけるように）福音書と詩篇とを基にシリア語を少し学ぶというだけではもはやなく、宗教の他に歴史・地理学・数学・物理学・文法・修辞学・古代語・現代語・論理学・哲学が教えられます。

②これに並行して、十七世紀の第二四半世紀以降、彼らがヨーロッパで大変有り難く思ったアラビア語の印刷所を導入しようという動きが出てきます。近東では、アラビア語の本が最初に印刷されたのはクズハッヤーにおいてで、文字はアラビア文字ではなくガルシューニーでした。既に述べたように、マロン派の人々のうちアラビア文字を知っていたのはわずかで、聖職者の大部分はアラビア語をガルシューニーで書いていたのです。

実際、アラビア語の印刷所ができるのはようやく十七世紀末においてのことで、マトゥンのフンシャーラ（地名）の聖洗礼者ヨハネ修道院という、カトリックの皇帝派の修道院においてでした。これはイエズス会士フロマージュ神父と、有名な司祭にして神学者アブド・アッラーフ・ザーヒルとの協力の成果でした。この印刷所が、最近フランクフルトのブックフェアで復元され展示されました。イスタンブールにはアラビア語とヘブライ語で印刷された本がありましたが、アラブ世界にはまだそのようなものはありませんでした。キリスト教徒たちはアラブ世界で最初の印刷所をつくり、かくてこの地域に近代の産物を持ち込んだことを誇りにしています。

エジプトについて言うと、ボナパルトがカ

イロのブーラクにアラビア語の印刷所を導入し、イスラム世界が印刷本を発見するようになるのは、ようやく十九世紀になってからのことです。

H　宣教師たちの到来とアレッポでのルネサンスの初穂（十七・十八世紀）

一　宣教師たち

①十七世紀の初期、一六二〇年から一六二五年の間に、宣教師たちが初めてアレッポにやってきます。フランシスコ会士、カルメル会士、カプチン会士、イエズス会士がいました。

宣教師たちがなぜアレッポをまず選んだのかと思われるかもしれません。いくつもの理由があります。アレッポのキリスト教徒共同体は他所のよりも規模が大きく、さらに、商業的にも文化的にもアレッポは、まだ小さい都市にすぎなかったベイルートやトリポリよりもずっと重要な、活発な中心地でした。

さらに、イスタンブールの宮廷により近く、モスルに向かう道の途上にあり、イラクへも、さらにその向こうのインドへも道が開けているなど、地理上の優位さもアレッポにはありました。かくてアレッポは、内陸のダマスクスへも遠方のイラクやインドへも影響を及ぼしうる中心的位置を占めていたのです。

②司牧的・教育的な霊的情熱に燃え立ち、これら宣教師たちは、大変大雑把なアラビア語で話していたのですが、人々を引き寄せます。時には説教はイタリア語で話され、ローマで教育を受けたマロン派の通訳がアラビア語訳を行ないました。また別の時には、説教はマロン派の人とともに予め準備され、そのマロン派の人がこれをアラビア語で語りもしました。

こうしてマロン派が、宣教師たちと非カトリックの東方の（ギリシア、アルメニア、シリア）共同体との間の橋頭堡の役割を果たしました。後者の人々は宣教師たちに引き寄せられます。というのは、宣教師たちが説いていたのはキリスト教的実践・霊性における刷新であり、また彼らの神学的講話は明快かつ構成がしっかりしており、そのようなものは時として自分たちの司祭には欠けているものだったからです。ギリシア正教会の共同体の中で多くの主教たちは親カトリック的でした。この時期にはギリシア・カトリック教会もシリア・カトリック教会も未だ存在せず、それらが生まれるのは十八世紀においてであるということを想起する必要があります。

この宣教運動はアレッポの東方諸教会のすべての共同体の間に広まり、そこから、ダマスクス、サイダ（シドン）、トリポリなどの（他の）中心地へと広がります。宣教師たちは大都市に学校を建て、自ら運営するか、或いは、次第に同様な行動をするようになったマロン派が運営するようになります。

③宣教師たちの感化のもと、十七世紀後半には東方の諸修道会が出現します。それらはアレッポの人々によってつくられ、レバノンの辺鄙な地域に定着するようになり、とりわけケスルワーンの山地に、政府当局を逃れて定着するようになります。どのグループも、東方の伝統（バシレイオスの伝統及びアントニオスの伝統）と西方の伝統の両方から着想を得ています。

二　アラビア語の聖書

同じ時期、近代のキリスト教アラビア語文化は、またもや、翻訳・註釈という側面から

アラビア語化されていきます。

キリスト教徒たちは聖書が印刷されることを望み、ローマは信仰弘布会のもとで委員会をつくることを決定しました。この計画は、総主教ユースフ・アッリッジー（一五九六―一六〇八）の兄弟でありダマスクスのマロン派の司教だったサルキース・ブン・ムーサー・アッリッジーの監修下に進められます。彼は一六三八年八月二九日に死ぬまでローマで作業を行ないました。

この計画は東方・西欧の多くの学者の協力によって実現し、その中にはカルメル会士、サンタ・リドゥウィナのセレスティノ（一六〇四―一六七六）[13]とカプチン会士トマソ・オビチニ・ダ・ノヴァーラがいました。彼らはこの翻訳作業に何年も費やすことになります。

半世紀以上もの熱心な仕事と改訂の繰り返しの結果、一六七一年に聖書の最初の全訳が、日の目を見ました。大変美しい字で印刷され、ラテン語・アラビア語対観となっており、数多くの木版画で飾られた、当時アラビア語で書かれた最も美しい著作でした。

三　ゲルマーノス・ファルハート（一六七〇―一七三二）

①キリスト教徒たちは宗教的著作（神学、倫理、典礼、霊性等々）や世俗的著作（哲学、歴史、地理学、文学、詩、医学、天文学等々）の著述にも乗り出します。その中心的人物がゲルマーノス・ファルハートで、遠く十九世紀のルネサンス（ナフダ）を用意することになります。

この時代、つまり十七世紀及び十八世紀の半ばまで、住民全体の中で、特にキリスト教徒の間で、アラビア語のレベルは極めて低いものへと落ち込んでいました。その原因は全般的な文化的衰退と、トルコ語の侵略的影響です。もはやアラビア語は、いくつかのイスラム学校、及び将来のイマームを教育する場所、特にカイロのアズハル、といったところでしか学ばれていませんでした。むしろ限られたものだったこのサークルの外では、古典アラビア語はほとんど使われていませんでした。

一例のみ挙げれば、総主教ドゥワイヒー（一六三〇―一七〇四）は、（その著『諸時代の歴史』が物語るように）偉大な歴史家であり、（その著『至聖所の灯火』及び『疑念に対する答え』が物語るように）優れた神学者であるにもかかわらず、その使っているアラビア語はむしろ平俗なものでした。しかも、彼は自分で書く時にはアラビア文字でなくガルシューニーを使っています。

②このような時にアレッポの優れた人物、マロン派の司教ゲルマーノス・ファルハート（一六七〇―一七三二）が登場します。彼は、十八世紀初頭における、文化的・霊的・司牧的意味でのキリスト教徒の全体的刷新を惹起した、その真の仕掛け人となります。彼の重要な使命の一つは、キリスト教徒を再度アラビア語化することにありました。それをするために、まず彼は有名なイスラム教徒のシェイフ、スライマーン・アルナフウィーの学校に通い、衰退の中にあったアラビア語とアラビア語文学とを完全に習得します。

③キリスト教徒の間で文学的改革を実現すべく、彼は全く福音書をベースとしたアラビア語文法『練習問題の学習』をまず著します。イスラム教徒たちがコーランをベースに自分たちの文法を書いていたのと同様にです。こ

れは教育上非常な重要性を有しました。というのも、キリスト教徒がアラビア語に対して距離感を持っていた理由は、アラビア語がよそよそしく見えるというところにあったからです。ゲルマーノスはもっぱら福音書から例を引いたアラビア語文体論の教科書をも書いています。

彼は宗教的な色彩の詩を古典語で著し、これらの詩は際限なく書写され、次の世紀にサイード・アッシャルトゥーニーによって『ディーワーン』（詩の選集）として刊行されます。しかし、ゲルマーノスは決して、すべてのアラブ文人にとって陥穽となる言語的マンネリズムには陥りませんでした。彼はアラビア語に対し、それ自体のために関心をもっていたのではなく、それを自分の考えと信仰を伝える道具として捉えていたのです。彼の『ディーワーン』は文学作品であると同時に教理を教える作品でもありました。

④こうしてゲルマーノス・ファルハートはキリスト教信仰とアラブ文化の共生という方向で仕事をします。さらに彼は、残念ながら未刊行ですが、キリスト教を擁護する大変見事な護教論を著し、その中でイスラム教徒に対してキリスト教信仰を説明しています。四世紀間の中断の後で、彼が近代の著者として初めて、（イスラム教徒に宛てたキリスト教護教論という）このジャンルを再びとりあげたのです。さらに、多くの同時代人及び先駆者たちと異なり、彼は、他派のキリスト教徒に宛てた論争的著作であれ護教的著作であれ（残念なことに、宣教師たちの到来以来この文学ジャンルは大変盛んでした）、一冊も書いていません。

ゲルマーノスはキリスト教徒の文人のチームを組織します。その属する教派はばらばらで、彼らはこの知的・文化的刷新の開拓者となります。その中には、韻を踏んだ散文で大変美しいアラビア語の著作を書いたアルメニア人メケルディグ（すなわちジャン・バティスト）・アルカシーフ・ブン・アブド・アッラーフ・アルムハッラーがおり、正教徒スライマーン・アルアスワード（西欧ではサロモン・ニジェルと呼ばれた）がおり、さらにアブド・アッラーフ・カラーアリーのようなマロン派の人々がいました。

第二のアラブ・ルネサンスすなわち十八世紀のルネサンスの真の生みの親はゲルマーノス・ファルハートだと私は思います。このキリスト教的アラブ・ルネサンスが、十九世紀の偉大なるナフダへの道を整えたのです。

四　東方の諸共同体の中での反応

①ほどなくして、近東の大半の共同体はカトリックとなる宗派を有するようになります。シリア人たちからは総主教アンドレ・アヒジャーン（一六七七年没）、司教リズク・アッラーフ・アミール・ハーン（一七〇一年没）といった人々が出、アルメニア人たちの間では十七世紀後半に、イラクのカルデア人たちの間ではさらに早く十六世紀半ばに、カトリックとなる宗派が登場します。

②ギリシア正教の側では状況はかなり複雑です。一五八三年三月十二日、マルタ出身でシドンのラテン司教だったレオナルド・アベラは、東方諸教会とローマの合同を実現すべく、ローマから教皇グレゴリウス十三世によって送り出されました。同年にアレッポで総主教ミシェル・サッバーグと会い、信仰告白を提示し総主教の署名を得ました[14]。同じ総主教は服従を表明した手紙を教皇に送り[15]、もう一通を一五八六年五月に枢機卿サントロ

に送りました[16]。

同様に、アレッポ出身でギリシア正教会の総主教だったエウテュミオス・カルマ（一五七二―一六三五）はローマへの服従を行為によって示し、（イエズス会士ジャン・アミュー神父によれば）それが理由となって一六三五年一月一〇日にダマスクスで毒殺されました。

その弟子、アレッポ人マカーリオス・ブン・アルザイームは、一六四七年から一六七二年まで総主教であり当時最も有名なキリスト教徒の一人で、自分の教会を救うためにイスタンブール、グルジア、さらにはロシアにまで赴きましたが、ローマともかなり頻繁な手紙のやりとりをしており、彼自身は実はカトリックだったのではないかと幾人もの歴史家が思うほどでした。確かにこの総主教は親カトリック的でしたが、カトリックのためになるようもう一歩踏み出すつもりはありませんでした。それはカトリック教会が是認した手順だったのです、というのも、カトリック教会が望んでいたのは教会と教会の合同であり、個人的改宗の例として或る個人がカトリックに帰依することではなかったからです。

③こうして、一七二四年七月二四日或いは八月四日に総主教アタナシオス・ダッバース（彼はアレッポに、シリア初のアラビア語印刷所を導入した人物です）が亡くなった時、総主教を選ぶ権利を有したダマスクスの人々は、九月に集まり、セラフィム・ターナースを選び、彼はキュリロス六世という名を名乗り、公式に自らのカトリックたることを宣言しました。コンスタンティノープルは対立総主教を選ぼうと努力しましたが、百パーセント正教徒のアラブ人主教を一人も見いだすことができず、アタナシオスの秘書だったキュプロス人シルヴェストルを任命しました。

この時以来十九世紀末（一八九八年）に至るまで、正教会の総主教は皆ギリシア人となります。この状況は今日に至るまでアレクサンドリアでもエルサレムでも続いています（信者の大多数はアラブ人なのですが）。

カトリックへの移行はシリアにおけるカトリック勢力の浸透力と関係があります。そのように浸透が進んだ主たる理由は、マロン派の宣教師たちが熱心だったこと、彼らがもたらしたメッセージが肯定的・積極的なものであったこと、加えて、イスタンブールが認めるキリスト教諸国、とりわけフランスの保護を得られるという事実が多くの人々にとって特権と感じられたこと、といったところです。カトリックの宣教師たち及びマロン派の同志たちがかちえた成功、彼らの進んだ知的教育、彼らの魅力は、多くの正教徒たちの考えを不可避的にローマの方へと向けました。

このことはまた、当時この地域の正教徒たちが陥っていたほとんど知的放棄と呼んでよい状態からも説明できます。現に、オスマンのくびきのもとにあったギリシアは、聖職者の教育という点でローマが果たした役割を果たせていませんでした。当時の有力国の中ではロシアだけが正教会であり、かつアラブの諸共同体に対して当然の成り行きの影響力を及ぼすことができていたのです。

I　ナフダ（十九世紀）

十九世紀には、ナフダ（覚醒）は聖職者から信徒へと伝わり、後者は教会に対して一定の距離をとるようになり、果ては知識人の一部と総主教の間のいさかいまで起こりました。これが言えるのはファーリス・アルシドゥヤーク（一八〇四―一八八八）の有名なケース

で、彼はイギリスの聖書協会のために聖書を翻訳した後で、マロン派の総主教と自分の兄弟との間のいさかいの結果、イスラムに改宗し（といっても名目だけですが）、アフマドという名を名乗りました。

かくて、ジャン・フォンテーヌ神父の学位論文が明らかにしているように、十九世紀の半ばごろチュニスのアラブのキリスト教徒たちの間で拒否の運動が生じます。彼らは教会があまりに硬直化しているとしてこれに対する反対運動を起こし、アラブ世界のルネサンス、正確に言えばナフダのために、全力を尽くして活動したのです。

一　ボナパルトの遠征（一七九八―一八〇一）

ムハンマド・アリーが登場する直前、一七九八年から一八〇一年にかけて行なわれたボナパルトのエジプト遠征は、エジプトに対して、さらに中東全体に対して、深い刻印を残すことになります。それは軍事的次元においてというよりはむしろ文明的次元においてで、というのもボナパルトはイギリス海軍に敗れたからです。この三年間にボナパルトはまばゆいほどの事業を後世に残しました。

実際、彼が率いてきたのは一六五人の、まだ二十歳になったかどうかというような若い学者たちでした。彼らは文芸・科学委員会のメンバーであり、この委員会はグランドゼコール（理工科学校、土木学校）で教育を受けた土木工学・軍事の技術者、建築技師、製図家、民族学者、植物学者、歴史学者、言語学者、数学者等々から成っていました。彼らは古代・近代エジプトの多種多様な側面の研究にとりかかったのです。

記録的な短時間で彼らはエジプトを行き巡ってそのあらゆる側面を研究し、この三年間にまとめた科学的記録をフランスに持ち帰りました。二十八年間かけて彼らは、最初はニコラ・ジャック・コンテ（一七五五―一八〇五）の指導のもと、次いで、一七九九年七月に三つの言語が記されたロゼッタ・ストーンを発見した土木学校の技師ミシェル＝アンジュ・ランクレの指導のもと、そして最後にエドム・フランソワ・ジョマール（一七七七―一八六二）の指導のもと、九百の図版と三千のデッサンとを収めた『エジプト誌』と題されたユニークなモニュメントをつくりあげました。約二世紀を経て一九九九年に、エジプト政府はこれをアラビア語に翻訳することを決定しました。どれほどこの仕事がユニークかを物語っていると言えます。

二　ムハンマド・アリー（一八〇一―一八五一）

ムハンマド・アリーは、彼は彼でこれら学者たちから衝撃を受けます。フランス人の軍事的優越に呆然とすると同時に、今や科学は西欧にあってイスラム世界にはもはやないのだということを彼は理解します。

彼はエジプトをヨーロッパの一国にしようと決心します。彼は人々を、医学、戦争術、数学、科学等々あらゆる分野での教育のために、基本的にはフランスに送り込みます。彼らが戻ってくると、ムハンマド・アリーは彼らを、自分がつくったカイロの城塞に閉じ込め、西欧で学んだことをすっかりアラビア語で書き終えるまで外出を禁止し、本が書きあがると、それらは非公開の部屋に置かれ、かくて彼らは自分の仕事にのみ専念するようになり、「科学を事とするイスラム教徒の修道士」に仕立てられたのです。

すべての人に対して開かれたリベラルな体制を標榜するエジプトへと逃れるレバノンの

キリスト教徒の数がだんだん増えてきます。再びレバノンに戻るようになる前に、彼らはエジプトのカイロやアレクサンドリアにおいてアラビア語の新聞を創刊します。こうしてアル・アフラーム（今日でも存在し、アラブの日刊紙の中で最も有名なものの一つです）が一八七五年、アレクサンドリアにおいてサリーム・タクラーとビシャーラ・タクラーによって創刊され、一八九五年には発行地がカイロへと移りました。彼らはまた、劇場、歴史小説、自由詩、映画、要するに文化界におけるあらゆる新奇なものをつくりました。また、彼らはいろいろな産業や銀行づくりも手がけ、エジプト経済において第一級の役割を果たすことになります。

結論

十三世紀という長い期間を通じて、変わらない要素をいくつか挙げることができます。

一　文化的自覚と開放性

まず、歴史を通観してみて印象深いこと、またアラブ世界でキリスト教徒の力を成していたもの、それは、彼らが概して、自分たちの文化的根をよく意識しつつ、他方で自分たちの文化以外の文化に対して開かれていた人間だったという事実です。文化的自覚と開放性とは、彼らの歴史の根底にある二つの特徴です。二つのうち一つが欠けると、もはや周囲の世界との交流はありません。そうなると、自分たちにとっても周囲の世界にとっても、刷新ということはなくなります。

例えば、もし私が二つのうちの一つの要素だけ、すなわち、他の文化への開放性、この場合で言えばおよそ西欧的なものへの開放性だけを自らのものとし、自分の伝統の中に深く根ざしていなければ、つまり根がなければ[17]、私はもはや一西欧人でしかないでしょう。そんな人々は既に数百万といった数で存在します。そこに一人が加わるのに何の新味がありましょうか。私にできる独自な貢献とは何なのでしょうか。

逆に、もし私が自分の文化によく根ざしており、しかし他のいろいろな（文化的）伝統に対して開かれていなければ、私は単に一アラブ人でしょう。そんな人々は既に数百万といった数で存在します。そこに一人が加わるのに何の新味がありましょうか。私にできる独自な貢献とは何なのでしょうか。

二　二つの世界の間の架け橋

第二に、史的概観の中で印象深いのは、キリスト教徒たちは二つの宗教、二つのメンタリティー、二つの文化の間で架け橋の役割を担ったということです。確かに彼らはキリスト教徒ですが、文化的に言えば、彼らはイスラム教徒でもあったのです。

私自身、何ら恥じることなく言いかつ宣言したく思います、すなわち、文化的次元、慣習、行動様式等々といった点で、私はイスラムから多くを学んだと。キリスト教徒の特徴、そして或る意味で彼らをイスラム教徒から区別する徴表、それは、キリスト教徒がアラブ文化に対する文化的自覚がイスラム教徒より浅いということではなく、キリスト教徒が、アラブ文化に根ざしていると同時に他の文化に対して開けている、ということでなければならないのです。

フナイン・ブン・イスハーク、クスター・ブン・ルーカー、ヤフヤー・ブン・アディーの時代、九・十世紀には、ギリシア文化が、

優越する存在としてありました。それは後の西欧にとってもそうでした。十六・十七世紀には、ヨーロッパ文化（とりわけイタリア文化）が第一級の地位を占めていました。今日では、この第一級の地位を占めるのは欧米の文化です。これらすべての段階において、キリスト教徒はこれら諸文化への開放性の重要性を強く実感し、それを自分たちのアラブ世界へ伝達しようとするでしょう。

逆に、様々な段階において、東方の文化と伝統を西欧に伝えるのも彼らであるでしょう。十六―十八世紀にマロン派の東洋学者がそのようにしてみせたとおりであり、また今日、西欧の諸々の大学にいるキリスト教徒の移民もそのような存在です。

三　つねに選択・識別を行なうこと

文化的選択・識別は、歴史の様々な偉大な時期においてキリスト教徒の知識階級が担ってきた重要な役割です。すなわち、周囲の文化の中にあるもので積極的な評価に値するもの、自らを豊かにするものを選択・識別し、それを自らのものとし伝達していくことが、彼らの役どころだったのです。今日の我々も、聖パウロが言うように（Ⅰテサロニケ五・二一）、すべてのことを見分けて良いものだけをつかむことが重要です。単に外から来たものだからといってつかむのも、また同じ理由でそれを拒絶するのも、我々のすべきことではありません。

イスラム世界と西欧との間の政治的・経済的・文化的・宗教的紛争のゆえに、今日多くのイスラム教徒は、外から来るあらゆるもの、とりわけ西欧から来るものを拒絶する、しかも十把一からげに拒絶する傾向があります。狂信的イスラム教徒の傾向はこういったものです。反対の立場とはいえ似たような理由で、狂信的なキリスト教徒もアラブ世界・イスラム世界から来るあらゆるものを十把一からげに拒絶する傾向があります。これらは二つの狂信であり、安直さに発する態度、しばしば恐れに由来する態度にほかなりません。このような態度が、我々のアラブ世界が蔵する深刻な問題をあらわにしています。

重要なのは、すべての要素をふるいにかけて、選択・識別を行なうことです。外来・異質な要素を自らの文化に統合し、自分の文化を継続・発展させる新たな文化を作り出すことが重要なのです。逆に、自分の伝統の最上の要素を他の人々に伝えることによって、私は他の人々の文化を豊かにし、彼らをして新たな文化をつくらしめることができるのです。

四　文化は生きた現実である

文化とは、石のかけらのようなブロックではありません。それは生きており、絶えず進化を遂げつつあります。我々の文化、我々東方のキリスト教徒の文化は、ギリシアの遺産、シリア語の遺産、アラブの遺産、イスラム教の遺産、西欧の遺産、そして他の多くの要素から成っています。明日には、それはどうなるでしょうか？　神だけがご存じです。これらすべての層は私の遺伝的・文化的遺産の中で階層を成しており、それをまとめて一体、すなわち絶えざる発展の相にある一体となすべく総合を行なうのは、我々自身なのです。我々の歴史のどの段階にせよ、それを「黄金の時代」として再生すべきモデルとし、以て我々というグループの文化的進化を阻害することは、問題外です。それは命を殺すことになるのですから。

五　総括的結論

様々な時代を通じて、キリスト教徒たちはしばしば、多様な文化的ルネサンスの推進者でした。そしてこれが、彼らの高貴さの最も偉大なる称号なのです。しかし、それが可能だったのは、このような新機軸の次元に対して開かれていたイスラム教の支配体制の存在のおかげであり、他者性に対するその開放性のおかげでした。さらに、ヘレニズムをよく同化し、ついにはそれを西欧に伝えなおすに至ったのは彼ら（イスラム教徒）でした（ラテン語に訳されたイスラム教徒の哲学者、学者、医学者のことを思えば、このことは充分理解されるでしょう）。

実際、シーア派であれ特にキリスト教徒であれ、およそスンニ派でないすべての者に対して狂信的な政策を実施したアッバース朝第十代カリフ、ムタワッキル（八四七―八六一）の時代には、キリスト教徒によるアラビア語の著作はぴたっと止まったことが見てとれます。

反対に、その数十年前、リベラルな考えを有し、時として「イスラムの合理主義者」と称されるムータジラ派を大いに奨励したアッバース朝第七代カリフ、マームーン（八一三―八三三）の時代には、キリスト教徒は我々にアラブ語の著作を数十も遺し、当時の文明への貢献によって輝き渡りました。指導者たちの開放性という事実によるものです。

他方で、これら王・カリフたちは、多国語を駆使でき複数の文化世界に属していたこれらキリスト教徒たちの貴重な助けなしには、自分たちの文化的構想や、文明的次元での計画を、実現することはできなかったでしょう。

歴史的に言ってこのようなことが、社会的・政治的次元における、東方のキリスト教徒に固有な使命だと私は思います。たいていの場合、彼らは政治的機能を担うことはできませんでした。ひょっとすると、彼らは政治的権力を持たない幸運に恵まれた、と言うべきかもしれません。

彼らには、自分たちの社会、イスラム社会に深く刻印を残すことができる分野が残されています。文化・霊性の分野がそれです。彼らは、歴史を通じて、いくつかのささやかな、或いは壮大な、達成を誇ることができます。しかし、すべきことはまだ膨大にあります。これこそが、彼らに委ねられた高貴な、かつすばらしい使命なのであり、その使命を彼らは、最上のものに対してつねに開かれた社会、過去と充分な連帯によってつながっている社会、そしてこれから築くべき未来に向かってつねに進化の相にある、そのような社会を、つくろうとするすべての人々（イスラム教徒であれ、キリスト教徒であれ、その他の人々であれ）と協力して、担っていくのです。

註

1 これはメルヴ（今日のマリ）という都市のことで、トルクメニスタンにあり人口五万四千人、イランのマシュハドの東約二百キロのところにあります。

2 Marcel Bataillon, *Erasme et l'Espagne* (Paris 1937)を参照。

3 Louis Ponnelle et Louis Bordet, *Saint Philippe Néri et la société romaine de son temps (1515-1595)* (Paris 1928)という古典的著作を参照。

4 Cyril Martindale, SJ, *St. Louis de Gonzague et la Renaissance italienne (1568-1591)*, (Le Puy : Editions Xavier Mappus, 1946、356ページ。E. Delpierre et A. Noché, SJ による英語版からの改訂版)を参照。

5 Riccardo Garcia Villoslada, SJ, *Storia del Collegio Romano dal suo inizio (1551) alla soppressione della Compagnia di Gesù (1773)* (Rome : Université Grégorienne, 1954)を参照。

6 教皇の抵抗を前にして、エリアーノは、自らの計画を受け入れやすくするために、物事をやや悲観的に描き、マロン派が、カトリックの信仰を失いかねないほどに知的・神学的に非常な悲惨な状況にあると説明しました。ローマで彼がマロン派について書いたことを読む場合には、この「戦術的」要素を忘れてはならないと私は思います。続く数世紀にも、宣教師や、東方人自身が、西方に援助を求めるに当たっては、東方のキリスト教徒の政治的・物質的窮境を話に加えることで、同じ「戦術」を使うことになります。

7 この総主教及び彼の幻滅についてはGeorg Graf, *Geschichte der christlichen arabischen Literatur*, vol. 4 (coll. «Studi e Testi» 147, Cité du Vatican 1951), p. 12-13を参照（詳細な文献目録もあります）。

8 エリアーノに関する文献は相当数あります。彼の生涯と著作とに関するよくできた要約（及び完璧な文献目録）はGeorg Graf, *ibidem*, p. 210-217に見られます。これを補完するものが、レバノン及びエジプトのイエズス会士の古文書学者、すなわちサミ・クーリ神父（P. Sami Kuri）とシャルル・リボワ神父（P. Charles Libois）の仕事で、現在刊行準備中です。

9 Nasser Gemayel, *Les échanges culturels entre les Maronites et l'Europe. Du Collège Maronite de Rome (1584) au Collège de 'Ayn Warqa (1789)* (Beyrouth, 1984), p. 19-28を参照。

10 Joseph Nasrallah, *Histoire du mouvement littéraire dans l'Eglise melchite*, tome IV, 1 (Louvain : Peeters, 1979), p. 59.

11 アラビア語の文字はシリア語の「グ（の子音）」という音を持っておらず、これの転写をするのに*kāf*を以てし、トルコ語やペルシア語でするように二本目の横線を上に加えました。しかしこの二本目の横線はアラビア語では書かれないことから、人々はカルシューニーと呼ぶようになりました。しかし、正確な発音は「ガ」ルシューニーだと証明できます。

12 *Psalterium Hebraeum, Graecum, Arabicum, et Chaldaeum, cum tribus Latinis interpretationibus et glossis* (Genoa: Petrus Paulus Porrus, 1516).

13 このカプチン会士については拙著 *Célestin de Sainte-Lydwina, alias Peter van Gool (1604-1676), missionnaire carme et orientaliste. Étude historico-littéraire*, «Études sur le patrimoine carmélitain» 4 (Beyrouth 1995)を参照。

14 *Vatican ar. 1482*, fol. 1-2を参照。

15 *Vatican ar. 46*, fol. 66v-67rを参照。

16 *Vatican ar. 46*, fol. 69を参照。

17 アラブ人は、良い生まれでない人のことを軽蔑的に「あれは根のないやつだ」と言います。